

高校生を対象としたジェンダー学習構築のための調査

Survey of High School Students' Awareness for Gender Lesson Planning

佐々木多津子*・日景 弥生**

Tazuko SASAKI*・Yayoi HIKAGE**

要 旨

本研究では、本報に続くジェンダー学習を構築するために、3つの高校の生徒を対象にジェンダー観を調査することを目的とした。その結果、以下のことが得られた。

36の調査項目からなる「意識」「行動」「感情」における高校生のジェンダー観は、「意識」が最も「敏感」で、次いで「行動」「感情」の順となった。しかし、学校による違いはみられなかった。各調査項目について男女で比較したところ、16項目で有意差がみられ、そのうち4項目で男子の方が女子より「敏感」だった。これらの結果から、続くジェンダー学習では、①高校生は「意識」では「敏感」であることから一般常識ではなく自分に置き換え、かつフィードバックして自分の実態に気づくことのできる授業、②学習内容として「働くことは両性に必要である」ことと、「生活的自立も両性に必要である」ことを実感できる授業を構築する必要であると結論づけた。

キーワード；ジェンダー観、高校生、アンケート調査、意識、行動、感情

I はじめに

近年、学校教育にも「ジェンダー・バックラッシュ」(一定の影響力を得たフェミニズムへの巻き返し、逆襲の現象¹⁾)の動きがみられるようになった。例えば、東京都教育委員会は2004年に「ジェンダー・フリー」という用語の使用に関する見解を發表し、各都立学校長に、「ジェンダー・フリーにかかる配慮事項について」を通知した。これによれば、『男らしさ』『女らしさ』を否定するような『ジェンダー・フリー』の考えに基づく男女混合名簿(以下、混合名簿)は、男女共同参画社会実現に向けて混合名簿を推進してきた東京都教育委員会の考え方とは相容れない。従って、『男らしさ』『女らしさ』を否定するような誤った考え方としての『ジェンダー・フリー』に基づく混合名簿を作成することがあってはならない。²⁾(下線部は引用文献を著者が集約)としている。しかし、ジェンダーに関する教育実践は途絶えることなく続き、最近の報告には分校³⁾や堀内⁴⁾

らの実践などがある。また、その教材も豊富になり、例えば橋本紀子他編『ジェンダー・フリーの絵本』全6巻⁵⁾等が刊行されている。

さらに、教師に対するジェンダー教育啓発のための授業提案(男女平等教育研究会)⁶⁾、小・中・高等学校の教師による自らの授業実践の報告に基づく授業例の提案⁷⁾、そして大学の女性学およびジェンダー論の研究者と教師による教材の提案⁸⁾なども刊行されている。これらは、現代社会がかかえるジェンダー問題について子どもたちに考えさせる機会を与えるもので、子どもの学びの手だてとはなるものの、どの実践も単発的な問題提起とテーマとして示された学習である。

このような授業実践研究から次のことがいえる。第1に学習教材が生徒自身の問題から乖離している場合が多い。つまり、学習教材が家庭や社会の問題にとどまっており、生徒自身が自分について見つめることが難しい。しかし、ジェンダー学習で最も重要で、かつ難しいことは自分の中で「当

*青森県立三本木農業高等学校
Sanbongi-Nogyo High School

**弘前大学教育学部家政教育講座

Department of Home Economics, Faculty of Education, Hirosaki University

たり前」と思って過ごしている性別役割分業や差別、生活様式に気づく事である。荒井⁹⁾は“ジェンダー学習とは自己の問題に気づき、認識し、実践する力を培うことであり、はじめの目標としてジェンダーに「気づく」ことである”としている。堀内¹⁰⁾も“ジェンダーの気づきを促すためには自分自身を見つめる事が基本になる”としている。著者らが行ったジェンダー学習による生徒の変容の分析から、変容のプロセスには気づきがあることが確認された¹¹⁾。

第2に学習による生徒の変容（考え方も含む）が見えにくいことである。例えば調理実習では生徒の変容は「技術」として目に見えてわかり、家庭での実践から生徒自身の生活にフィードバックしていることも捉えることができる。しかし、ジェンダー学習実践報告の多くは、授業の進め方等の詳細な記述はあるものの、授業評価は生徒の感想にとどまり客観的に行われていない。そこで、著者らはジェンダー学習に関する実践研究を通して生徒の実態と授業前後の変容に着目したいと考えた。

一方、Houston¹²⁾、堀内¹³⁾は、男女平等教育を進める上で不可欠な視点として、「ジェンダー・センシティブ」の概念を提唱している。すなわち“ジェンダー・フリーの教育をいうとき、教育事象に関するジェンダー差をなくすことによってジェンダーを解消しようとする努力も必要である。しかし、これはジェンダーの存在に気づかない状態を生み出す可能性があり、形式的な男女平等のもとで差別が見えにくくなっている現在、ジェンダー・バイアスに敏感すなわちジェンダー・センシティブになりジェンダー・バイアスを除去していくことが必要である”としている。

本研究では、上記した問題点を克服できるようなジェンダーに気づく授業を立案・実践するために、高校生のジェンダー観の実態調査を行うことを目的とした。

II 方法

1) 調査時期、対象者及び方法

調査時期は、各高校における家庭科の学習状況を考慮し2002年5月下旬～6月上旬に行った。

調査対象者は、高校生の学力差を考慮し、青森県の三八地区にある高等学校3校で実施した。対象は専門高校（ある専門的な知識を中心に学んで

いる）でいるA高校116名（男子64名、女子52名）、八戸市内の進学校であるB高校152名（男子51名、女子101名）、普通高校であるC高校140名（男子56名、女子84名）の1年生を対象とした。

調査方法は質問紙法により、各学校の授業時間に実施した。回収率は100%だったが、回答中に「無回答」があった生徒は続く分析のために調査対象から除外した。そのため、調査対象者は合計で384名となり、有効回答率は94.1%だった。調査対象者を表1に示す。

表1 調査対象者

高校	調査対象者	有効回答数	有効回答率
A	116名 (男64,女52)	110名 (男61,女49)	94.8%
B	152名 (男51,女101)	138名 (男42,女96)	90.8%
C	140名 (男56,女84)	136名 (男55,女81)	97.1%
全体	408名 (男171,女237)	384名 (男158,女226)	94.1%

2) 調査項目

アンケート項目は東京女性財団作成の「ジェンダーチェック学校生活編」¹⁴⁾「ジェンダーチェック家族・家庭生活編」¹⁵⁾を参考にし「意識」・「行動」・「感情」に分けて各12項目ずつ作成した。それらを弘前大学2年生142名（男子25名、女子119名）を対象に予備調査を行い、調査項目の妥当性を調査した。その結果得られた調査項目を表2に示す。なお、「意識」に関する項目はQ101～Q112、「行動」に関する項目はQ201～Q212、「感情」に関する項目はQ301～Q312とした。

3) 集計方法

対象者には、各調査項目について「はい」、「?」、「いいえ」のいずれか1つを選択させ、ジェンダーセンシティブ（以下「敏感」）に回答した場合に1点の得点を与え、それ以外は0点とした。この結果、得点の高い方が「敏感」を示すようにした。また、「敏感」に対応する用語として「鈍感」を用いることにした。

分析には、SPSSソフトウェアとMicrosoft Office Excelを用いた。

表2 調査項目

	項目
「意識」	Q101 プロポーズは男性からしても、女性からしてもいいと思う
	Q102 男女ともに職業を持ち、経済的に自立することは望ましい
	Q103 女の子に「しとやかさ」を求めるのは時代遅れだ
	Q104 親が男の子にだけ高い学歴を期待するとしたら不平等である
	Q105 家庭内で妻と夫の関係は平等であるべきだ
	Q106 リーダーシップは女の子にも男の子にも身に付けさせる方がよい
	Q107 デートの費用は男性にだけ負担させずに、半々がよい
	Q108 親が寝たきりになったら、女性だけでなく、男性も同じように介護すべきだ
	Q109 子どもが生まれたとき休職、退職して育児をするのは、父でも母でもよい
	Q110 男は仕事、女は家庭という考え方はもう古くない
	Q111 男子も女子も料理、掃除、洗濯ができなければならない
	Q112 男の子はロボットや乗り物、女の子は人形やままごとと、プレゼントを男女で決めつけてしまわない方がよい
「行動」	Q201 あなたの家では家事や食事の後片づけをいつも女性がしている
	Q202 あなたは洗濯を自分でする
	Q203 力仕事は男がする(力仕事は男に頼む)
	Q204 男の子の外泊はいいが、女の子の外泊はだめだ
	Q205 避妊についての配慮は男性がすべきだ
	Q206 デートに行くときにお弁当を作るのは女の役目だ
	Q207 生徒会長は男子がよい
	Q208 あなたは結婚しても名字を変える気はない
	Q209 あなたはプレゼントをする時、リボンの色は男の子なら青や緑、女の子はピンクや赤にする
	Q210 あなたは結婚しても一生仕事を続けたいと思っている
	Q211 自分の親に介護が必要になれば、自分がする。
	Q212 現時点で4年制大学に進学するつもりだ
「感情」	Q301 男性はまだしも、女性がたばこを吸うのは許せない
	Q302 頼りがいのある男性が好きだ(女性は守ってあげたい)
	Q303 男子は浪人してもよいが、女子はしないほうがよい
	Q304 男の子が泣くのをみると「男のくせに」と思う
	Q305 あなたは「男らしい」人になりたい(「女らしい」人になりたい)
	Q306 結婚したら男は家族を養うものだ
	Q307 自分の子どもで男の子が運動嫌いだと心配だ(女の子はそうでもない)
	Q308 自分の子どもで男の子がままごとや人形をほしがると心配になる
	Q309 先生が「～さん」と男子をよぶのは変である
	Q310 ギャンブル(パチンコやかけごと)は女がすべきではない
	Q311 裁縫はやはり女の方が向いている
	Q312 男女で100%競争をして女子が勝ったらうれしいですか

網掛け部分;「いいえ」の回答をジェンダー・センシティブとした項目

III 結果および考察

1. 各学校における生徒のジェンダー観

1) 生徒の「意識」に関する結果

3つの学校における生徒の「意識」に関する結果を図1に示す。学校間の差はみられるが、これらの調査項目は、おおむね「はい」と回答した者が多く、中でもQ108、Q105、Q111、Q104、Q101の5項目はその割合が多く、Q101「プロポーズは男性からしても、女性からしてもいいと思う」やQ111「男子も女子も料理、掃除、洗濯ができなければならない」のように、近い将来経験するであろう項目が多くみられた。

一方、「敏感」の割合が少ない項目はQ103、Q109、Q107で、Q103「女の子に『しとやかさ』を求めるのは時代遅れだ」やQ107「デートの

費用は男性にだけ負担させずに、半々がよい」のように、社会の慣習に関する項目には、生徒は「敏感」ではなかった。また、学校間でχ²検定を行ったところQ103(p<0.001)、Q109(p<0.01)、Q112(p<0.05)の3項目で有意差がみられた。

2) 生徒の「行動」に関する結果

3つの学校における生徒の「行動」に関する結果を図2に示す。学校間の差はみられるが、これらの調査項目は、図1の「意識」に比べて「敏感」と回答した者は少なくなった。しかし、「敏感」が多かったものはQ211とQ204の2項目で、「行動」に関わる項目の中では生徒は「敏感」だった。

Q211「自分の親に介護が必要になれば、自分

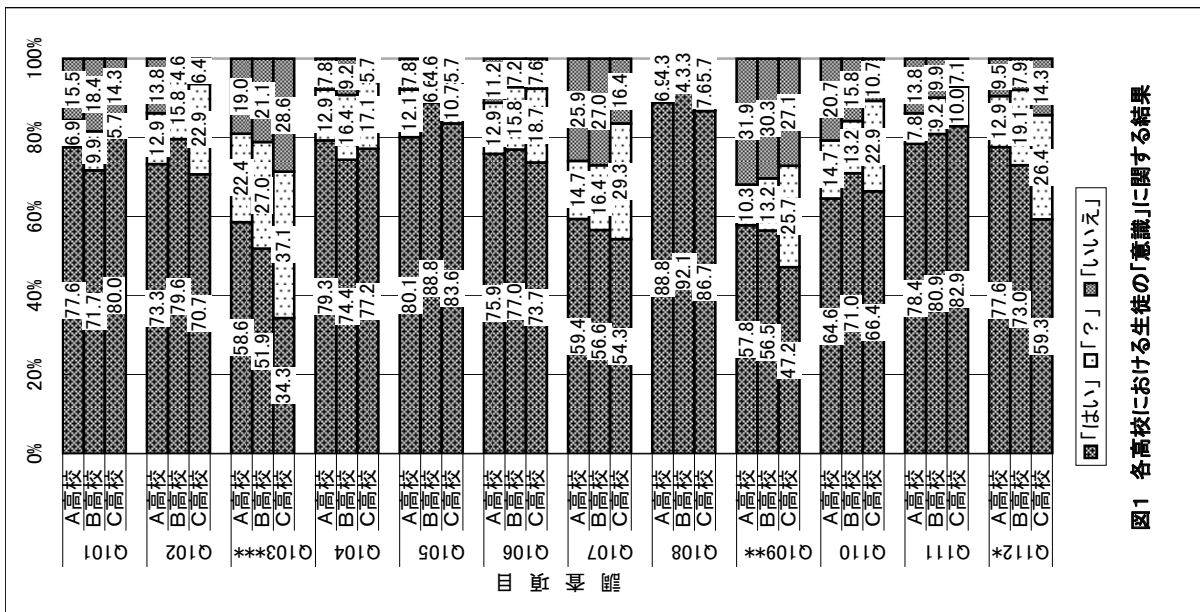


図1 各高校における生徒の「意識」に関する結果

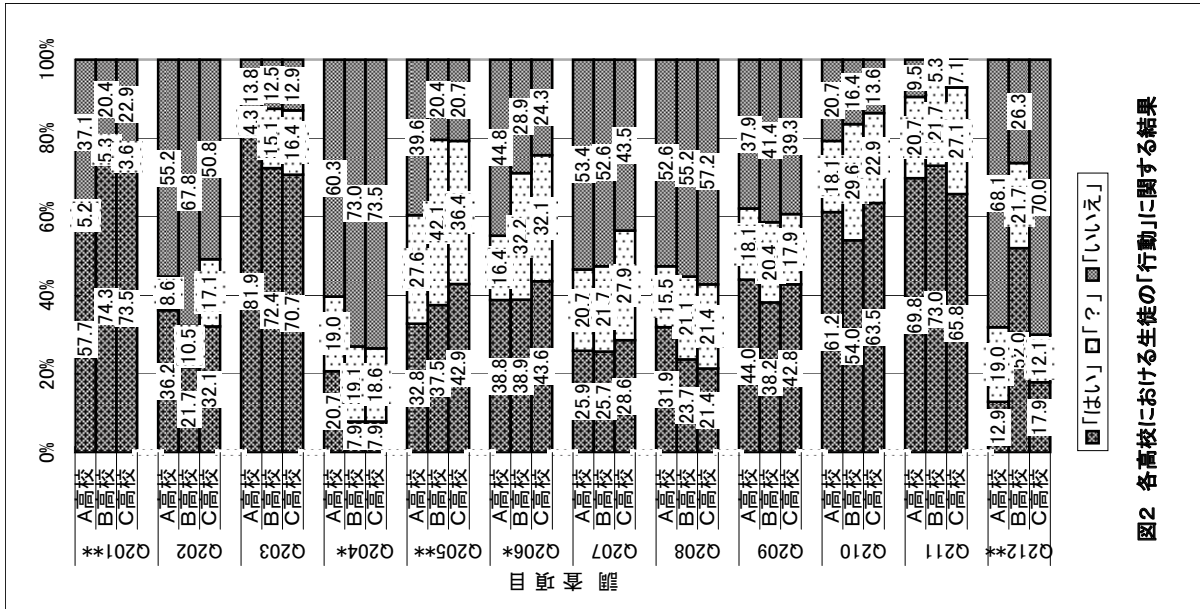


図2 各高校における生徒の「行動」に関する結果

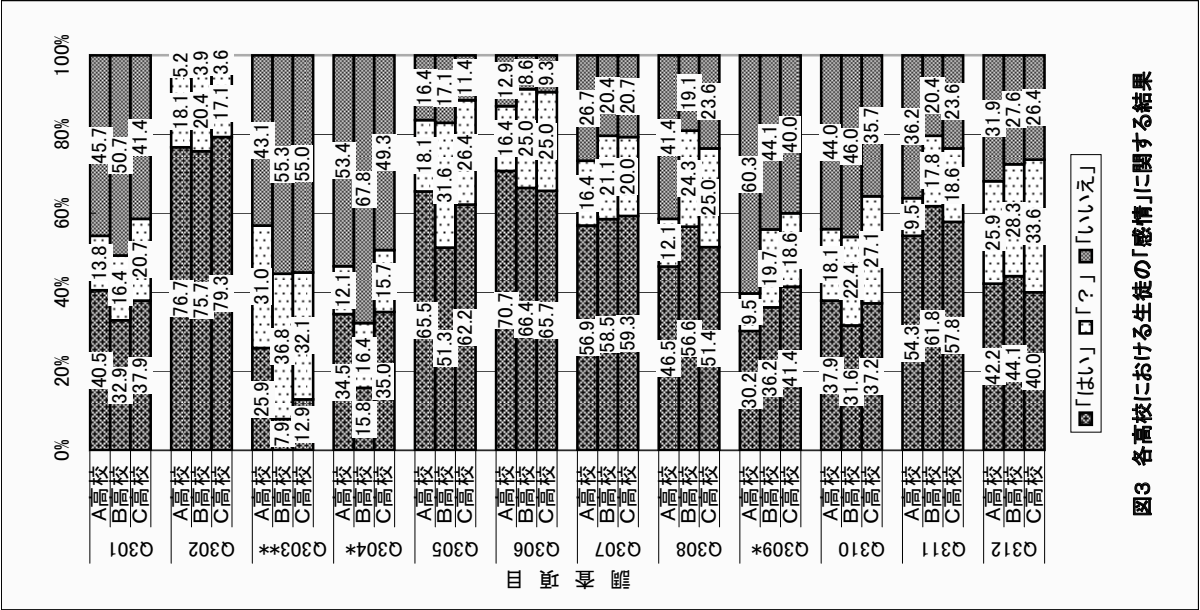


図3 各高校における生徒の「感情」に関する結果

がする」と類似した項目である Q108「親が寝たきりになったら、女性だけでなく、男性も同じように介護すべきだ」も「敏感」だったことから、生徒は親の介護については「意識」も「行動」も一致していることがわかった。

一方、「敏感」と回答した者が少なかった項目は Q203、Q205、Q201で、中でも Q203「力仕事は男がする（力仕事は男に頼む）」に「いいえ」と回答した者は、いずれの高校でも約10%と少なく、固定的ジェンダースtereotypeがみられた。

また、学校間で χ^2 検定を行ったところ Q201($p<0.01$)、Q204($p<0.05$)、Q205($p<0.01$)、Q206($p<0.05$)、Q212($p<0.01$) の 5 項目で有意差がみられた。

3) 生徒の「感情」に関する結果

3つの学校における生徒の「感情」に関する結果を図3に示す。学校間の差はみられるが、これらの調査項目は、図1の「意識」や図2の「行動」に比べて「敏感」と回答した者は少なかった。しかし、「敏感」が多かったものは Q303と Q309の2項目で、日々の学校生活に関わる項目(Q309)や、近い将来そうなる可能性がある項目(Q303)で、生徒に身近な項目だった。

一方、「敏感」と回答した者が少なかった項目は Q302、Q306、Q305、Q304で、中でも Q302「頼りがいのある男性が好きだ（女性は守ってあげたい）」に「いいえ」と回答した者は、いずれの高校でも約5%と少なく、ここでも固定的ジェンダースtereotypeがみられた。また、学校間で χ^2 検定を行ったところ Q303($p<0.01$)、Q304($p<0.05$)、Q309($p<0.05$) の 3 項目で有意差がみられた。

4) 各学校における「意識」「行動」および「感情」の比較

各学校の生徒が「意識」「行動」および「感情」の項目に、「敏感」と回答した割合を表3に示す。3つの分類でみると、上記したように「敏感」と回答した割合は「意識」>「行動」>「感情」の順となり、中でも「意識」は他の2つに比べてかなり「敏感」への回答率は高かった。また、3つの分類の間には有意差($p<0.05$)がみられた。

各学校でみると、平均ではB高校 \geq A高校>C高校の順になり、A高校とB高校は僅差だった。

表3 各学校の生徒が「敏感」に回答した割合(%)

	A高校	B高校	C高校	平均
「意識」	76.6	79.6	70.0	75.4
「行動」	43.9	43.4	37.6	41.6
「感情」	37.6	36.1	30.3	34.7
平均	52.7	53.0	46.0	

3つの分類ごとにみると、「意識」ではB高校>A高校>C高校、「行動」ではA高校 \geq B高校>C高校、「感情」ではA高校>B高校>C高校の順となり、3つの分類でもA高校とB高校はわずかの差だったが、C高校は3校の中でどの分類でも最も低かった。また、いずれの場合も有意差はみられなかった。3つの高校の特徴は、上記したように、B高校は進学校、A高校は専門高校、C高校は進学者のあまり多くない普通高校であるが、生徒の「意識」「行動」および「感情」と学力とは関連がないことがわかった。

2. 調査項目における男女差とその特徴

3つの学校の生徒が「敏感」に回答した割合を平均し、男女間で有意差があるかどうかを項目ごとにまとめた結果を表4に示す。「意識」では Q101、Q104、Q111の3項目が、「行動」では Q201、Q202、Q204、Q208、Q210、Q211、Q212の7項目が、「感情」では Q302の1項目の計11項目が男子の方が「敏感」の割合が高くなったが、残り25項目では女子の方が高くなった。男子の方が高くなった項目には、Q202「洗濯を自分でする」のように性別役割分担や、Q208「結婚しても名字を変える気はない」のように社会通念に関するものが含まれていた。

次にこれら36項目について t 検定により男女差があるかどうか調べたところ、「意識」では Q101、Q103、Q106、Q107の4項目、「行動」では Q201、Q203、Q205、Q206、Q208、Q210の6項目、「感情」では Q303、Q304、Q305、Q306、Q311、Q312の6項目で有意差がみられた。これら16項目のうち男子の方が「敏感」を示したのは、Q101「プロポーズは男性からしても女性からしてもいいと思う」、Q201「あなたの家では家事や食事の後片づけをいつも女性がしている」、Q208「結婚しても名字を変える気がない」、Q210「結婚しても一生仕事を続けたいと思ってい

表4 各項目における生徒が「敏感」に回答した割合(%)と男女差がみられた項目

	項目	平均	項目	平均	項目	平均
男子	Q101	85.6	Q201	35.9	Q301	43.1
女子		72.1		21.5		50.8
男子	Q102	73.9	Q202	32.5	Q302	6.7
女子		77.3		30.2		2.9
男子	Q103	37.9	Q203	4.2	Q303	44.1
女子		59.0		21.4		60.5
男子	Q104	80.8	Q204	65.4	Q304	47.9
女子		77.3		74.8		64.0
男子	Q105	85.5	Q205	17.0	Q305	7.5
女子		86.7		37.9		30.9
男子	Q106	71.8	Q206	26.5	Q306	6.1
女子		80.1		40.5		15.4
男子	Q107	51.5	Q207	48.9	Q307	24.1
女子		64.6		53.3		22.3
男子	Q108	89.4	Q208	53.7	Q308	29.0
女子		92.4		6.3		29.0
男子	Q109	58.9	Q209	38.9	Q309	48.0
女子		55.3		41.9		52.1
男子	Q110	67.4	Q210	81.9	Q310	42.3
女子		69.7		44.1		43.3
男子	Q111	83.6	Q211	68.3	Q311	20.9
女子		79.9		72.1		32.4
男子	Q112	67.8	Q212	34.3	Q312	19.9
女子		75.3		24.2		59.5

網掛け部分：男女差がみられた項目

る」の4項目だった。Q101、Q208、Q210の3項目は、労働をとまなう男性の負担がなく、実生活に影響を及ぼさない項目だった。一方、Q201は、女性は家事労働を当たり前とっており、そのため家事労働に対する女子の「敏感」への回答が少なく、結果的に男女で有意差がみられたものと推察した。また、Q208とQ210では男女の差が非常に大きく、女子は「男は仕事で、女は家庭」という性別役割の考えを多くの面で否定しつつも、結婚したら仕事をやめ養ってもらいたいと思っている¹⁶⁾ことが明らかとなった。よってこの2つの項目では、男子の方が「敏感」であるというよりは、むしろ女子が「敏感」の程度が低いと見た方がよいと考える。これらの項目はいずれも社会的慣習であり、女子の方がそれら社会的慣習の影響が大きかったことを示唆している。

3. 調査結果から考える高校生を対象としたジェンダー学習構築への示唆

これらの結果から、高校生のジェンダー観には学校間の有意差はなく、総じて男子よりも女子の方が「敏感」だった。しかし、女子の「仕事を持つ」という意識が低く、「結婚したら仕事を辞め、

養ってもらいたい思っている」という実態も明らかとなった。学校間でみると、進路については違いが見られたが、高校生の実態は類似していた。また、一般常識である「意識」では「敏感」の割合が高かったが、生徒が自分自身に置き換えて考える「行動」や「感情」では低くなった。高校生は「差別をしてはいけない」などの規範は理解しているが、無意識のうちに性による固定的な考え(性別役割)を肯定していると考えられる。

以上のことより、高校生を対象としたジェンダー学習に必要な授業とはどのようなものかを以下の2点にまとめた。1点目は、高校生は「意識」では「敏感」であることから一般常識ではなく自分に置き換え、かつフィードバック¹⁷⁾して自分の実態に気づくことのできる授業が必要である。2点目は、学習内容として「働くことは両性に必要である」ことと、「生活的自立も両性に必要である」ことを実感できる授業を構築する必要があると考えた。

参考・引用文献

- 1) 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 岩波女性学事典, 東京, 岩波書店, 2002, pp.379
- 2) 浅井春夫・子安潤・鶴田敦子ほか著, ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る, 東京, 明石書店, 2006, pp.28
- 3) 例えば, 分校淑子ほか, 生徒主体のジェンダー・家族・保育の授業研究, 日本家庭科教育学会誌, 44 (3), 2001, p.261
- 4) 堀内かほる, 家庭科再発見, 東京, 開隆堂出版, 2006, p.138
- 5) 橋本紀子・朴木佳緒留・村瀬幸治編, ジェンダーフリーの絵本(全6巻), 東京, 大月書店, 2001
- 6) 男女平等研究会, 男女平等教育に関する学習ガイドブック—ジェンダーフリーな教育環境づくりのために, 1999
- 7) 橋本紀子・村瀬幸治・和田章子・中島みさき編, 両性の平等と学校教育—ジェンダーという視点からの授業づくり, 東研出版, 1999
- 8) 齊藤弘子・鶴田敦子ほか, ジェンダー・エキティを拓く家庭科, かもがわ出版, 2000
- 9) 荒井紀子・吉川智子・大嶋佳子, 高校家庭科におけるジェンダーを視点とした授業の構造化とその実践に関する研究(第2報): 授業の分析と評価, 日本家庭科教育学会誌, 45, 2002,

- p130-139
- 10) 堀内かおる・濱崎タマエ, <ジェンダーの授業>の生成と変容—子どもの学びと教師の関与をめぐって—, 日本教師教育学会年報 10 号 別冊, p126-134
 - 11) 山田桂子・日景弥生, ジェンダー授業実践における高校生の意識変容に関する事例研究, 東北家庭科教育研究, 第 6 号, 2007, p.37-42
 - 12) Houston, Barbara, Should public education be gender free, in Stone Lynded, 1985, p122-134
 - 13) 堀内かおる, 教科と教師のジェンダー文化: 家庭科を学ぶ・教える女と男の現在, 東京, ドメス出版, 2001, p47
 - 14) (財) 東京女性財団; ジェンダーチェック 男女平等への指針 学校生活編, 1997
 - 15) (財) 東京女性財団; ジェンダーチェック 男女平等への指針 家族・家庭生活編, 1995, p 26-27
 - 16) 西平直喜・久世敏雄編, 青年心理学ハンドブック, 1988, p 806-808
 - 17) 山田桂子, 家庭科教育におけるジェンダーを考慮した授業研究, 弘前大学大学院教育学研究科教科教育専攻家政教育専修平成 14 年度修士論文, 2003, p148
- (2007. 7. 31受理)